

忠臣藏とは
何か

丸谷才一

忠臣藏とは何か

一九八四年十月十二日 第一刷発行
一九八五年一月十一日 第四刷発行

著 者 丸谷才一

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号一二二
電話 東京(〇三)九四五―一二一(大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定 価 一・二〇〇円

©Saichū Maruya 1984, Printed in Japan.

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

1	火事装束の男たち	5
2	十郎と五郎	21
3	劇的な事件	57
4	宝永六年正月のこと	108
5	再び火事装束の男たち	161
6	祭としての反乱	213
	参考文献抄	238
	あとがき	243

装丁
和田 誠

カバー原画・勝川春章「初代中村仲蔵の定九郎」

忠臣藏とは何か

1 火事装束の男たち

まづ芥川龍之介がこんなことを言つた。

「元禄の四十七士の仇討の服装といふのは、あれは元禄でなければ無い華美な服装なものです。あの派手な服装は如何なる時代にもなかつたやうですね。前時代から生き残つた古侍があの服装を見たらさぞ苦々しく思つたでせう」

すると、それを受けて、徳富蘇峯が上機嫌でかう言つた。

「彼等はなか／＼遊戯気分をやつてゐるんです」

「文藝春秋」昭和二年（一九二七）三月号に載つた座談会でのことだが（他の出席者は菊池寛と山本有三）、二人のこの発言はじつにおもしろい。ごくあつさりと急所をついてゐるやうな気がする。座談会の常として、話題はすぐ別のことに転じてしまひ、忠臣蔵論はこれつきりになつたけれど、しかしこれだけでも充分に値打がある。このとき三十六歳の小説家と六十五歳の歴史家

とは、一杯やりながらの気楽な放談といふ条件がさいはひして、忠臣蔵を解明するための最上の手がかりを、つい口にしてしまつたのである。まことに、イン・ヴィノ・ヴェリタス。酒のなかにこそ真実がある。ひよつとすると彼らは、あまりいけるほうではなかつたかもしれないが、そんなことはこの際どうでもよからう。わたしにはこの短い応酬のほうで、小説家が十年前に書いた『或日の大石内藏助』よりも、歴史家が二年前に上梓した『近世日本国民史』元禄時代義士篇よりも、遥かに洞察に富んでゐるやうに、あるいはすくなくとも刺戟的であるやうに思はれてならない。ついでに言つて置けば、蘇峯は翌年十二月、陸軍士官学校で赤穂義士について講演したさうだが、そんな野暮な席では、遊戯気分云々なんて切れ味のいい意見はぜつたい出なかつたらう。

もつとも、このとき芥川の念頭にあつたのが具体的にはどういふ服装だつたのか、これはずいぶんむづかしい問題である。史実のほうの衣裳なのか、芝居のそれなのか、一概には決しにくい。と聞けば驚く人もあるかもしれないが、赤穂の浪人はあの夜、芝居で見るあのいでたち、つまり、左の襟に元禄十五年極月十四日（あるいは赤穂浪士）、右の襟に播州赤穂浅野内匠頭家来何のなにがし（あるいは何のなにがしだけ）と書いた白布をつけ、黒と白の山形模様（三角鱗形）を袖に染めた小袖、といふ服装で討入りしたのではなかつた。揃ひの火事装束で敵の邸を襲ふのは歌舞伎と人形浄瑠璃の工夫で、史実とは異なるのである。

話の順序として、まづ史実の討入り装束について述べる。

1 火事装束の男たち

これについては扱^さるべきものが三つあつて、一つは『白明話録』である。これは土佐東福寺の月海和尚^{おしな}（字は白明）が宝暦五年（一七五五）に語つたことの記録で、元禄十五年（一七〇二）、土佐から出て来たばかりの十九歳の月海は、泉岳寺にゐた。十二月十五日、朝食をすませ、礼日にあたるので礼茶（挨拶としてもてなす茶）のため集つてゐると、門番がやつて来て副司^{ふし}（禪寺の財政役）を呼び出し、かう述べた。只今、故浅野内匠頭殿^{たくみのかみ}の御家来およそ五六十人ばかり、「いろいろ異様な装束、槍長刀^{やりながなた}など持ちて」門にはいりましたが、お通しすべきかどうか、お伺ひ申し上げます、といふのである。副司がそのことを和尚に伝へ、まづ役僧をつかはして調べさせようなどと言つてゐるうちに、浪士たちはずらりと墓地へまはつてしまつた。

若年のころ、しかも江戸へ出たばかりで出会つた大事件だから、よほど印象が強烈だつたのだらう、記憶が鮮明だし、細部が妙に現実感に富んでゐる。この事件の史料は一体に胡散くさいものが多いのだが、これは信用して差支へないやうな気がする。そのなかで、「いろいろ異様な装束」といふのは、まづ揃ひの衣裳でなかつたことを示してゐるし、次に、火事装束でなかつたことの傍證にならう。もし火事装束だつたら、「異様」などとは言はずに、端的にさう要約しなうなものだからである。語り口から推して、月海にはそれだけの知力が充分にあつた。

もう一つは池田玄斎の『弘采録』に見える秋田の僧某（のちに莊内川添村永鷲寺の住職）の談話である。この僧は元禄十五年に十八歳、駒込吉祥寺で修行中だつたが、討入りの夜たまたま友人を訪ねて泉岳寺にゆき、そこに泊つたため、翌朝、赤穂の浪士を見かけることになつた。わた

しはかういふ記録があることを森銃三の考證によつて知つたのだが、彼の現代語訳によれば、浪士は「いづれも黒い衣類のわづかに膝を掩ふばかりのものを着、同じ色の羽織を着てゐる。袖口に白い布が当ててある」となつてゐる（『初雁』）。火事装束を思はせる記述はない。ただし原文に当つてゐないため、文体から真贋を決めることはできないけれど。

第三の史料は『寺坂信行筆記』である。これは足輕、寺坂吉右衛門の回想録で、ところどころ後人の手がいひつてゐるかもしれないが、おほむね信じてよささうだし、彼が仕へてゐた吉田忠左衛門とその子、沢右衛門の衣裳などは、とりわけ信憑度が高い。これは蘇峯も同意見で、長文の引用を敢へてしてゐるのである。ここでは父子の服装を表にして示すことにしよう。

	吉田忠左衛門	吉田沢右衛門
頭巾	黒革に白革筋の兜形。八幡座色革にて三重座。前庇(?)は猩々緋。しころ(頸から襟を防ぐ垂れた部分)は白羅紗。裏は柿いろ。惣廻りは笹べり。兜の緒は縮緬。	白唐木綿で鉢金入り、しころをつける。後ろじころには吉田沢右衛門兼貞と記してある。頭巾の裏は本紅いろ。裏地に鎖を入れる。兜の緒は鼓の調べの緒を用ゐる。
下着	肌着は浅黄羽二重、両面綿入れ、腰まで。鎖帷子を着す。これも腰まで、袖なし。	肌着は浅黄羽二重、両面綿入れ。鎖帷子を着す。肌着、鎖帷子の長さは父と同じ。
籠手	さらし一重ざしの籠手(手全体を覆ひ包む小具足)をさし、手の甲なし。	籠手をさし、手の甲なし。

1 火事装束の男たち

これだけでも揃ひの火事装束でなかつたことは明らかだが、どうやら一体に、機能性を重んじながらも華美で贅沢な服装だつたらしい。彼らはいはば華麗な夜盗のいでたちで吉良の邸に乱入した。蘇峯が評して、「これを見ても元禄武士の何物であるかが、想像せらるるのみでなく、

上着	帯	タツツケ袴	足袋	刀	たすき	雑
黒小袖、家の紋付、茶裏。上着の両袖をさらして小袖の上に縫ひつけ、右の袖の外に吉田忠左衛門兼亮と書きつける。	下着の帯は飛紗綾（地が紗綾に似て厚く、とびとびに花紋のある織物）。	タツツケ袴は茶いろ羽二重、ただし裏つき。茶絹で包んだ鎖を脛楯（大腿部の防具）のやうにして当てる。	足袋は染紺色。陣わらぢ。	（略）	たすきは真田紐。	扇。采配。槍。
黒小袖、定紋付、紅裏。上着の両袖は晒布で袖形に引込み縫ひつける。右の肩の後ろに吉田沢右衛門兼定、肩書に兼亮嫡子行年二十八と書きつける。	上帯は手拭帯で、さらし四重廻り。下着の帯は緋縮緬。	タツツケ袴は浅黄羽二重、裏つき、脛当（脛の防具）を絹で包み当てる。	足袋は浅黄。陣わらぢ。	（略）	たすきは格子染の緋縮緬。	扇。鼻紙。大まさかり。取鎌。屋根乗り細引。

また元禄時代そのものが、躍如として活現せらるる感がする」と言ふのは、この派手好みに喝采してゐるのである。そして彼らの討入り装束の背後には、大石慎三郎のいはゆる近世初期の衣料革命が控へてゐた。ここからしばらくはこの歴史家の『江戸転換期の群像』その他によりかかつて記すことにするが、日本の庶民衣料は戦国末から近世初期にかけて、それまでの粗末な麻から丈夫で保温性に富む木綿に改まる。一方、高級衣料も、やはり近世初期、中国から上質の絹糸および絹織物が輸入され、在来やまゆの山繭系統の絹を追ひ払ふことになり、それが国民の全階層にひろがつて、このため大量の金銀が費された。当時、富豪の妻たちのあひだで衣裳くらべがはやつたのは、全国的な贅沢の、いはば頂点の部分であつたと言へよう。三井高利が延宝元年（一六七三）、つまり忠臣蔵の事件の約三十年前、江戸に越後屋といふ呉服屋を開いて（これが今日の三越のはじめ）、「現金安値掛値なし」の商法で巨利を博したのも、日本人全体のさういふ嗜好を巧みにとらへたからであつた。これは小説家の空想にすぎないけれど、赤穂の浪士の衣裳のなかには越後屋で求めたものもかなりあつたにちがひない。

さういふ史実の服装が歌舞伎と人形浄瑠璃によつて改められ、ひいては、彼らは揃ひの火事装束で討入りをしたとみんなが思ひ込むやうになつたわけだが、この誤解には無理からぬふしもある。相馬皓が『歌舞伎 衣裳と扮装』で述べてゐるやうに、一体に『仮名手本忠臣蔵』はいちおう時代狂言ではあるものの、ずいぶん写実的で、隈取や赤つ面とか、金欄きんらんや緞子どんすの上下かみしもなどがほとんど見られない。その点で、『菅原伝授手習鑑』、『義経千本桜』、『伽羅先代萩』、『加賀見山

旧『錦絵』^{こきやうのどしきえ}などとは舞台面の印象がまったく違ふ。われわれはその一応の写実性に引きずられて、討入りの衣裳をつい真に受けてしまひ、その結果、一国民の常識が出来あがつたのであらう。

火事装束の初出については、これも相馬皓の考證がある。討入りの八年後に当る宝永七年（一七一〇）、大坂篠塚次郎左衛門座で上演の東三八作『鬼鹿毛無佐志鑑』^{おにかげむさしあきみ}は、赤穂の浪士に材を採つたものであつたが、辻番附の絵を見ると、大岸左内（これが大石内藏助に当る）の役に扮した篠塚庄左衛門は、黒と白の山形模様の討入り姿である。ここから推して、寛延元年（一七四八）、『仮名手本忠臣蔵』初演の際に人形つかひの吉田文三郎（あるいはその息子の文吾）が工夫したといふ在来の定説は誤りで、文三郎は庄左衛門の創意を人形に取入れたのだ、とするのである。たしかな物證がある以上、相馬の説を信ずるしかないのはもちろんだけれど、実はこの考證を裏書きする史料が意外なところにひそんでゐた。

延享元年（一七四四）、伊勢松坂の樹敬寺では、実道なる住職が、おそらく説法だけでは人が集らないと考へてであらう、赤穂の浪士の物語を何回にも分けて語ることにした。聴衆のなかには檀家^{だんか}である小津家の息子、小四郎といふ十五歳の少年がゐるが、いつも柱によりかかつて居眠りしてゐるやうに見えるのに、家に帰るとかならず聞いたままを書き記して、一卷の聞書を作つた。小四郎少年が後の本居宣長であると知れば驚くことはないにしても、とにかく恐るべき記憶力と言はなければならない。この聞書は筑摩版全集に『赤穂義士伝』として翻刻されてゐるのだ

が、そのなかにかういふ箇所がある。

先ヅシヤウゾクハ黒^{クロ}ラシヤノ羽ヲリニヒシヤウ^ウノウラ、其表^{フモテ}ニシロヌノニテシルシニ
フタスジスジヲヒキ、カブト頭^{ツキン}巾ノ中ヘ兜ノハチヲ納^ヲメ、(中略)カブトノ銀^{ギン}ノマヘダテ物ニ、
いろはジルシヲカキタリ、(中略)而シテハシゴ大ヅチ等ヲモタセ、水カゴヲツケテ、火事
目付ノヤウニ見セテ行クベシト、(下略)

この年は『假名手本忠臣藏』初演の四年前だから、これはその影響ではない。やはり二十八年
前の『鬼鹿毛無佐志鎧』がかういふ討入り装束を広め、それが伊勢松坂の話好きの僧にまで達し
てゐたと見るべきであらう。篠塚庄左衛門は、同時代の坂田藤十郎や初世市川団十郎と違つて、
今はまつたく忘れられた歌舞伎役者だが、しかし彼は、日本人に最も人気のある説話の大詰の衣
裳を定めたのである。史実の討入りがどういふ服装だつたのかを知つたあとでも、それでもわれ
われはあの火事装束と切り離して忠臣藏伝説を思ひ浮べることができない。

そこで、芥川龍之介と徳富蘇峯は座談会るとき、どつちの服装を念頭に置いて語つたのかとい
ふことが問題になるが、芥川はどうやら史実に近いものを思ひ描いてゐたやうな気がする。『或
日の大石内藏助』の際に調べたはずだから、史実の討入り装束のことは一通り知つてゐるにちが
ひない。ただし、古い文献はともかくとして、当時の本で参考にしたものはおそらく重野安繹の

『赤穂義士実話』（明治二十二年「一八八九」）と福本日南の『元禄快挙録』（明治四十一年「一九〇八」）だつたと推定されるゆゑ（自殺の半年前では、座談会の準備として蘇峯の著書に当る余裕はなかつたと思ふ）、話はすこし厄介なことになる。両書はどちらも実證性を志してはゐるものの、それが不充分で、重野は、「其の装束は火消役人の躰に仕立て。肌に着込致し上着は過半紅裏の半着物。白襦しろすきをかけ。羽織を着し。（中略）股引脚半。頭かしらには火事頭巾へ鉢金はちがねを縫くるみ」などと述べ、日南は、「甲隊は平仮名の『い』の字から『ち』の字までを、左文字にして、円き前立の上に雕りつけ、乙隊は同じ仮名の『り』の字から『よ』の字までを、右文字にして、同じく現はし」などと記してゐるのだ。明治期の本だから仕方がないが、まだかなり歌舞伎に引きずられてゐるのである。当然、芥川もまた、史実が七分か八分に歌舞伎が二分か三分まじつたものを心に思つてゐたであらう。

蘇峯の『近世日本国民史』元禄時代義士篇にはかういふ誤りはない。それゆゑ彼は史実を充分にわきまへてゐたと言ふことができる。しかし座談会での、「彼等はなかなか遊戯気分をやつてゐるんです」といふ台詞は、史実の討入り装束がてんでんばらばらでありながら華美でしかも機能性に富むのよりはむしろ、ユニフォームになつてゐる芝居の衣裳のほうにいつそうふさはしいやうな気がしてならない。それは祭のときの、揃ひの浴衣ゆかたや揃ひの法被はっぴといふ町人風俗を連想させるからだ。何しろ片言隻句へんげんせきくをつかまへて言ふのだから気のせいだと笑はれればそれきりだが、わたしにはどうも、このとき蘇峯は歌舞伎の討入り装束をちらりと思ひ浮べてゐたやうな気がし

て仕方がない。

しかし大事なものは、小説家と歴史家が閑談に耽りながら、史実について語ったか芝居について語ったかといふやうなことではない。わたしに言はせれば、彼らの発言は、忠臣蔵といふ不思議な事件を見るための新鮮な視角を教へてくれるもので、彼らはむしろ、史実と芝居を打つて一丸とした歴史、そのものについて語ったのである。忠臣蔵事件の遊戯性とは何か。服装を軸にして討入りをとらへればどうなるか。歌舞伎役者は赤穂の浪士に扮するときなぜ火事装束を着ることにしたのか。これはおもしろい問題だ。ひよつとすると揃ひの火事装束は、忠臣蔵の本質に迫るための有効な手がかりかもしれないのである。

*

たぶん小学校にあがる前だったと思ふ。幼いわたしが大事にしてゐた一冊の絵本があつた。町の本屋で買つてもらつた忠臣蔵の話で、もちろん有名な画家の作でなんかない。ごくありふれた粗末な作りの、薄い本だった。わたしはそれがひどく気に入つて、飽きもせず毎日くりかへし眺めてゐた。とりわけおもしろがつたのは終りに近い四ページで、討入りの夜、そば屋でそばを食べてゐる見開き二ページと、雪の庭でのチャンバラを描いた、これも見開き二ページだった。それ以外はどうしても思ひ出せないのに、この二つの情景だけは半世紀後の今もありありと目に浮ぶ。